

「雨のみちのく；独居のたのしみ」 山本 周五郎 著 新潮社 1984年12月発行（新潮文庫）

全45話の短編随筆集で、漢字にはフリガナが多用されていて読みやすい書籍です。しかも文庫本のため、どこにでも持ち込めてちょっとした空き時間に読めます。一つ一つの話は、ウィットがきいていくすと笑えたり、ぞくっとしたり、考えさせられたりします。スマホの方が便利だと思うかもしれませんが、ここは文庫本の魅力をアピールします。すべての短編を紹介しきれませんので、「極貧者たちの喜びと怒りを」という話をご紹介します。

あなたは極貧者と身近に接する機会は、ほとんどないと思います。特に旭川の冬の空のもと、段ボールハウスで生活する極貧者は想像できないでしょう。極貧とは言えませんが、もしあなたが友達と一緒に買い食いができない、欲しいスマホが手に入らないとき、お金がなくて寂しい気持ちや少し理解できるかもしれません。その貧しさをぐっと深めた極貧は、人の心を蝕み、人としてのプライドを砕き、夢も希望も消し去って孤独な人をつくるのでしょうか、という疑問を本編は投げかけています。

また、持たざる人はありのままの自分を見せ、内にはみえや嫉妬、貪欲さも持ち合わせているとも書いています。貧しさは人を底が浅く単純なものにしてしまうので、すぐに心の中が他人から見透かされてしまいます。すると、本来は内に秘める嫉妬や貪欲さが、相手に見られることで、良くない結果をもたらしてしまいます。極貧ではない人からすると、その単純さが人としての底の浅さに映るので、彼らを軽視し、無能だと判断する材料にしてしまいます。本編があなたに問うているのはすべての極貧者が愚かであるか、ということです。いつまでも貧しい生活をするか、それとも貧乏から抜け出られるか、極貧者から見分けられるのでしょうか。一度でも極貧に落ちると、そこから這い上がるにはなみなみならぬ努力が必要です。あなたが成績でビリをとろうと、高専生という枠内でのボーダーであり、高専から弾かれたりはしません。しかし極貧というボーダーは、ハンディキャップとして社会から追放され、再び元に戻ることを困難にします。よって極貧の人たちを見ることで、あなたは現在の生活に安堵を感じるともこの本では述べられています。

最後に、たくさんの短編を読むことは、SNSなどで短い文章を読むこととはまるで違います。短編というまともは、短く端的にメッセージを読者に投げかけるからです。ICTの発展によって長い文章を読む機会が失われ、学生も短い文章ばかりに接すると嘆く声を多く聞きます。私は短い文章しか読めなくてもいいと思います。その代わり質の良い短い文章をたくさん読み、1つ1つよく考えてほしいと思います。最初は文章の流し読みでも構わないです。数を読み込みながら一つでも二つでも疑問を持ち、考えて自分の意見をまとめられると、アクティブな読書になります。ぜひこれを機会に、短くて質の良い文章を能動的に読んでください。